

静かな住宅街にひっそりと佇む住宅で、手前がコルビュジェの兄で音楽家だった、アルベール・ジャンヌレの家で、奥が銀行家で絵画コレクターであった、ラウル・ラ・ロッシュ邸でした。今は寄付されて、ル・コルビュジェ財団の本部となっています。

白一色の外観とは異なり、内部空間はまるで絵画におけるキャンバスのごとくル・コルビュジェ独特の色彩感覚によって彩られています。その色彩感覚は建築の自由な形態と合い極まっており、その控えめな内装色は自身の作品をより一層美しく魅せているようである。

また、ル・コルビュジェは常に「人」を意識して設計しているという事を館内を体験して感じました。これほどまでに人の目線に立って空間を構成している建築は無いのではないかと思うほど、空間の見せ方が美しく、隅々まで計算されていることに驚きを感じました。階段を上る途中から見る視線や吹抜けに面する廊下の手摺高さ、吹抜けを介して見る下階の見え方、陰影の処理、光の導き方など等、立ち止ってシャッターを押す場面が次々に訪れる住宅をこれまで私は見た事はありません。

